

特集 頻脈性不整脈を描く The world of 3D mapping



編集責任

埼玉医科大学 保健医療学部 臨床工学科

奥村高広 OKUMURA, Takahiro

出だしから私の昔話で恐縮だが、埼玉医科大学病院では1999年より不整脈治療に臨床工学技士(CE)が関与し始めた。医師とメーカーの方にご指導いただきながら、ペースメーカー業務はなんとかメーカーサポートを離脱できた¹⁾が、カテーテルアブレーションはカテラボの操作にとどまり、スティムレータは医師、アブレータはメーカーの方が操作していた。そんな中、「CARTO[®]システム」が当院にも登場した。メーカーの方がカテ操作をする医師と連携して巧妙に3Dマッピングを構築していく様子を、医療機器のプロフェッショナルであるCEとして羨望の眼差しで見つめていた。先に先輩はCARTO[®]の操作を始めたが、私はよだれをたらしながらカテラボを操作していた。しかして私はCARTO[®]を操作することなく、現在の職へと配転となった。

僭越ながら不整脈領域の特集号の編集の任を賜り、当時からは夢のようなが、多機種の3Dマッピング装置を巧みにCEが操作している現状から、「3Dマッピング」を、しかもそのみをテーマとしてピックアップすることに時間はかからなかった。何より私がこの特集号で学ぼうという魂胆でもある。

特集の冒頭では、不整脈治療における3Dマッピングとこの領域におけるCEについて医師より珠玉を賜りたく、当時の私たちには不整脈の勉強会を行って下さった恩師である埼玉医科大学の加藤律史教授に光栄にもお引き受けいただけた。当時を含め感謝申し上げたい。

まとめには「不整脈治療と臨床工学技士」

として日本臨床工学技士会のお立場から、今般の医師の働き方改革に伴うタスク・シフト/シェアを踏まえたCEの不整脈関連業務への関与の現状と将来について、前川正樹様にご執筆いただいた。日本心臓植込みデバイスフォローアップ研究会でのご活躍を拝見していた前川様にお引き受けいただけたことは光栄である。

そして本特集の中核を成す「3Dマッピングの実際」で、国内で使用される3機種の装置ごとに、原理、特徴、使用の実際、そして経験者の知る「コツ」「奥義」を披露いただいた。これを臨床現場のCE、しかも自身の後輩や教え子から解説していただけることは感慨深く、読者の皆様にもご満足いただけると自負する。そのために、貴重かつ豊富なマッピング画像の掲載に多くのカラーページを使用したので、読者の皆様もその細部までご供覧いただけると幸いである。

さらに、今回の「頻脈性不整脈を描く」という斬新なコピーは、本誌2021年8月号の特集「企業で活躍する臨床工学技士」に執筆いただいた、こちらも私の後輩である徳永満様からのアイデアである。この場で感謝申し上げたい。

最後に、本特集が多くの読者の皆様から反響を呼び、書籍化の話が舞い込んでくることを期待している。

■文献

- 1) 奥村高広, 大木康則, 矢島真知子ほか: 臨床工学技士によるペースメーカー業務を始めるために～安全を意識した患者フォローアップ～, 医工学治療 19(2): 127-134, 2007